

### 329. よみがえる縄文時代の湖辺の暮らし —米原市入江内湖遺跡の調査成果—

#### 1. はじめに

いりまないこ  
入江内湖遺跡は米原市の湖辺に位置する遺跡で、旧入江内湖の中に所在します。

この遺跡の中央部分に、国土交通省が国道8号米原バイパスを建設することになり、工事によって影響を被る地点について、事前に発掘調査を実施し、遺跡の状態・内容を把握する必要が生じました。

発掘調査は、平成12年から15年にかけて、滋賀県教育委員会を調査主体に、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となって行いました。今回、報告するのはその調査結果の概要です。

調査では、縄文時代や古墳時代の暮らし振りを示す資料が多数出土しました。

ここでは、縄文時代の水辺の暮らしに焦点を当て、それに関する出土資料についてご紹介します。

#### 2. 周辺の環境

遺跡の位置は図1・2のとおりです。

縄文時代の主食は、3頁で説明するように、各地で行われてきたこれまでの調査・研究の結果、魚介類（水産資源）と木の実（ドングリやトチノキといった森林資源など）だと考えられています。

入江内湖周辺は、琵琶湖際まで鈴鹿山地の一部が迫り出しており、琵琶湖の水産資源と山地の森林資源の双方が混在しています。食料がとても確保しやすい地点だったと考えられます。



写真1 手前が調査地点（南調査区）です。



図1 遺跡位置図  
遺跡は県の北東部に位置します。

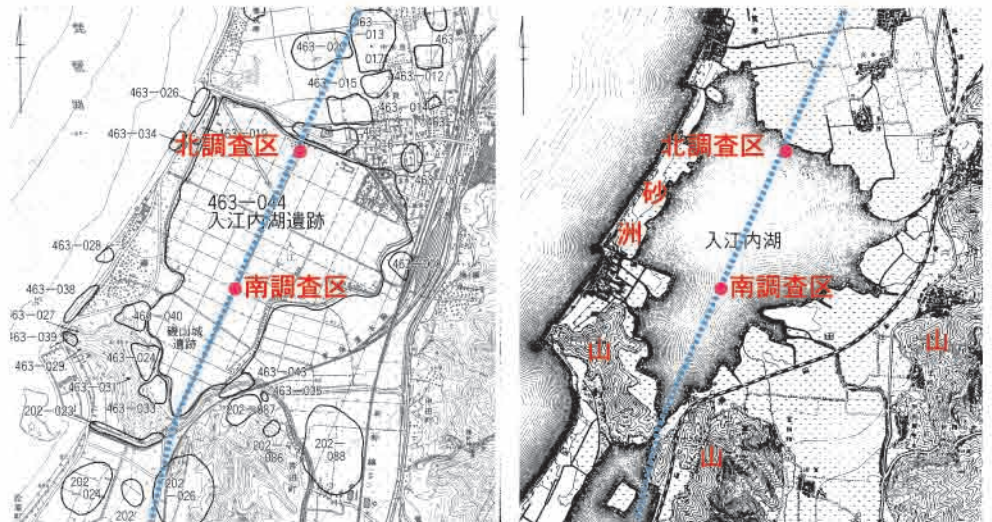


図2 遺跡周辺の地形と調査区の位置（左：現在 右：明治時代）

昭和19年に干拓されるまで、調査地は琵琶湖の「内湖」でした。「内湖」とは琵琶湖に面した「内湾」の湾口部に砂洲が形成され、琵琶湖と内湾が遮断されてできた湖です。さらに昔の縄文時代は、まだ「内湾」でした。今回発掘されたのは、内湾のほとりに残された生活の痕跡です。

### 3. 暮らしを変えた丸木舟

丸木舟は、人類が本格的に開発した最も古い乗り物です。この乗り物の開発により、それまで自由に活動できなかった水域でも、自在に動き回れるようになりました。その結果、移動や漁撈の範囲を広げたり、物資の運搬を効率化させました。丸木舟の開発は人類の暮らしを大きく変えたのです。

日本列島で丸木舟の利用が目立ち始めるのは、約6,300～5,600年頃の縄文時代早期末から前期だと考えられてきました。入江内湖遺跡からは5艘の舟が出土し、そのうちの1艘の年代は約5,630年前の縄文時代前期に相当します。琵琶湖のほとりでは、全国的に見ても早くから丸木舟を暮らしに役立てていたことが今回の調査で判明しました。

入江内湖遺跡から出土した5艘の舟の型は、以下のように【Aタイプ】と【Bタイプ】の2つに分けられます。

草創期	約12,000年前
早期	約9,000年前
前期	約6,000年前
中期	約5,000年前
後期	約4,000年前
晩期	約3,000年前



右上：写真2  
入江内湖遺跡 5号丸木舟  
縄文時代前期中頃の丸木舟（約5,630年前）  
ひのきの大木を削り貫いて作っています。



右下：写真3  
入江内湖遺跡 4号丸木舟  
縄文時代後期初頭の丸木舟（約4,105年前）  
モミ属の大木を削り貫いて作っています。

#### 【Aタイプ】

縄文時代前期の5号丸木舟と3号丸木舟です。先端はV字型に尖り、側面形は弧状を呈します。取り回しはしやすいタイプですが、沖合いに漕ぎ出るのは難しいタイプ—沿岸部・浅瀬用です。



先端部＝V字形



(模式図)

舟底部側面形＝弧状



5号丸木舟 約5,630年前



3号丸木舟 約5,145年前

#### 【Bタイプ】

縄文時代中期末以降の1号・2号・4号丸木舟です。先端はU字型ですこし角張り、側面形も台形状に角張ります。角張る分、水の抵抗が大きくなって、取り回しはしにくくなりますが、前方からの波に強くなるので、沖合いに漕ぎ出るのに適しています。



先端部＝U字形

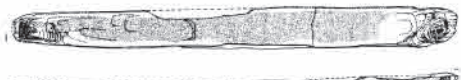


(模式図)

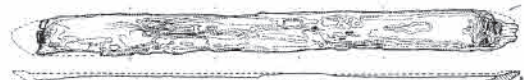
舟底部側面形＝水平・台形



1号丸木舟 約3,700年前



2号丸木舟 約3,870年前



4号丸木舟 約4,105年前

図3 出土丸木舟のタイプ

(各図とも上は平面図、下は側面図・断面図)



#### 4. 暮らしを支えた水産資源

左のグラフは、大津市粟津湖底遺跡第3貝塚（縄文時代中期初頭：約5,000年前）の分析結果です。貝塚には、そこに暮らしていた人たちの食料残滓——今でいう生ゴミ——が捨てられていました。それを掘り出して分類し、種類ごとの量を集計し、カロリーに換算したデータです。これを見ると、意外と獣類（シカ・イノシシ）の割合が少ないことが分かります。同時に、木の実（トチノキ・イチイガシなど）や魚介類（シジミやフナ・コイ・ナマズ）などの割合が多かったこともうかがえます。粟津湖底遺跡の縄文人の主食は木の実と魚介類だったのです。

入江内湖遺跡の調査でも、コイ科魚類やギギなどの魚骨がたくさん出土しました。また、食料にしたかどうかは今後の研究課題ですが、「マグロ」の骨も出土しています。

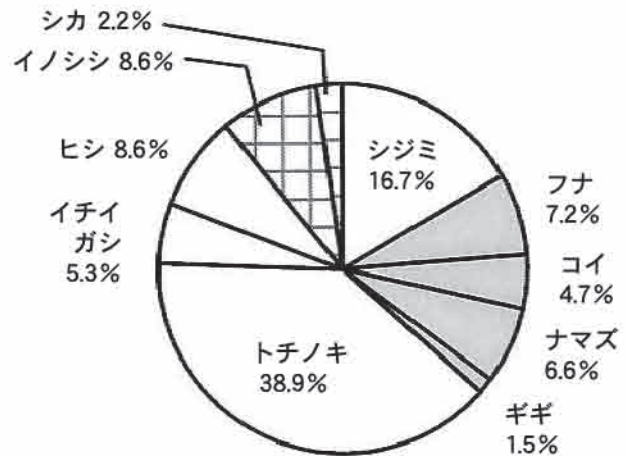
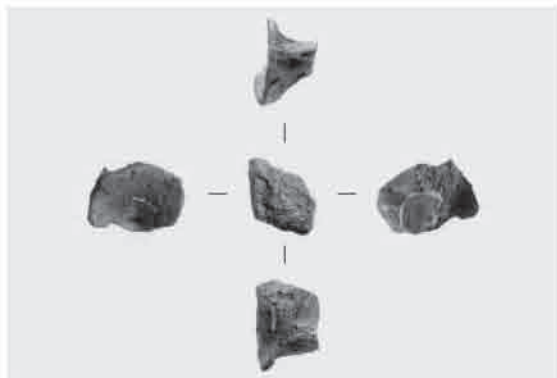
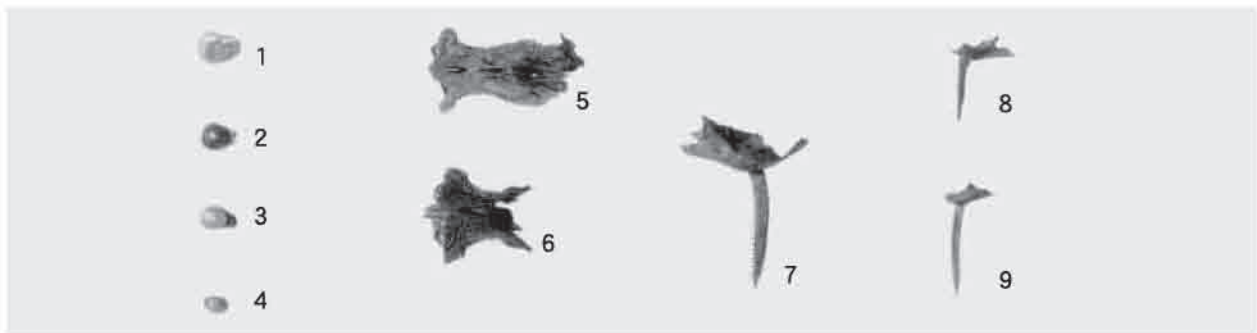


図4 大津市粟津湖底遺跡第3貝塚出土食料残滓の比率（カロリー換算）



上：写真4 1～4 コイ科 <sup>いんとうし</sup>咽頭歯（一部）

コイ科魚類（コイやゲンゴロウブナ、ニゴロブナなど）には、喉の奥に歯があります。種によって、すこし形が違っており、この形をよく観察するとどの種類のコイ科を獲っていたのかがわかります。入江内湖遺跡の今回の調査の場合、ゲンゴロウブナの咽頭歯が圧倒的に多くとられていたことがわかりました。かれらはゲンゴロウブナを狙って漁をしていたのです。

5～9 ギギ科

岩場などを好んで棲むナマズの仲間です。5・6は頭の骨、7～9は擬鎖骨+胸鰭棘です。

左：写真5

マグロの背骨の骨(図5)です。1点だけ出土しました。琵琶湖では今も昔もマグロは獲れません。若狭湾や伊勢湾で獲れたものを運び込んだようです。食料として肉付きで運び込まれたのか、飾りなどを作るための材料として、骨だけ運び込んできたのかは、今後の調査・研究上の課題です。

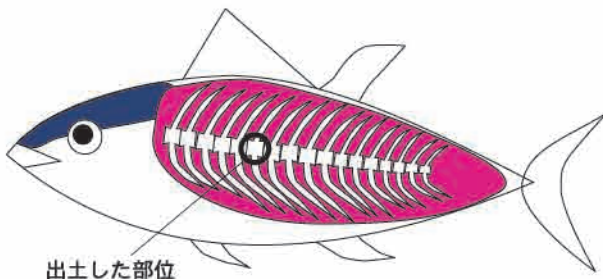
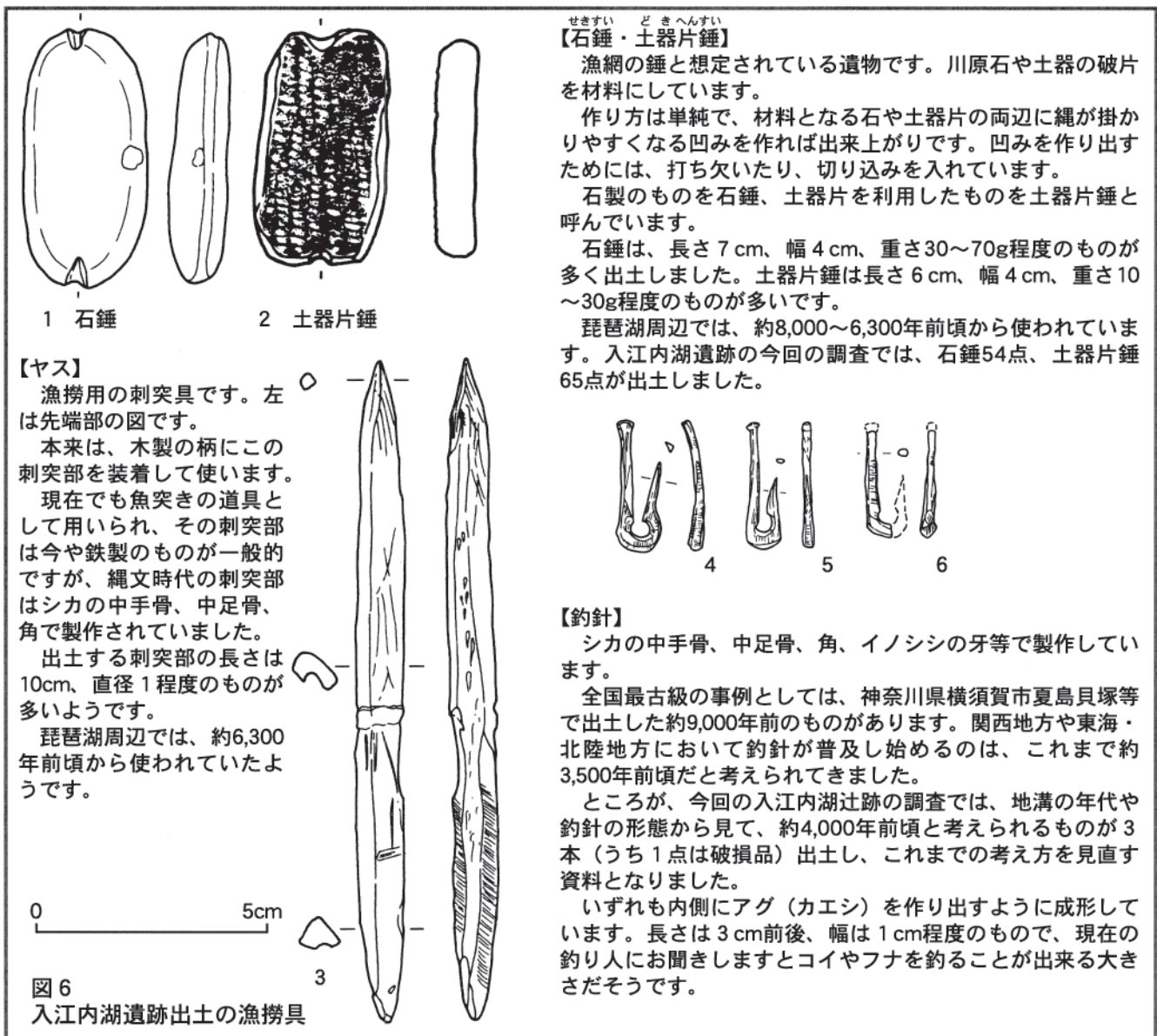


図5 マグロの骨の出土部位



せきすい どきへんすい  
【石錘・土器片錘】

漁網の錘と想定されている遺物です。川原石や土器の破片を材料にしています。

作り方は単純で、材料となる石や土器片の両辺に縄が掛かりやすくなる凹みを作れば出来上がりです。凹みを作り出すためには、打ち欠いたり、切り込みを入れています。

石製のものを石錘、土器片を利用したものを土器片錘と呼んでいます。

石錘は、長さ7cm、幅4cm、重さ30～70g程度のものが多く出土しました。土器片錘は長さ6cm、幅4cm、重さ10～30g程度のものが多かったです。

琵琶湖周辺では、約8,000～6,300年前頃から使われています。入江内湖遺跡の今回の調査では、石錘54点、土器片錘65点が出土しました。

【ヤス】

漁撈用の刺突具です。左は先端部の図です。

本来は、木製の柄にこの刺突部を装着して使います。

現在でも魚突きの道具として用いられ、その刺突部は今や鉄製のものが一般的ですが、縄文時代の刺突部はシカの中手骨、中足骨、角で製作されていました。

出土する刺突部の長さは10cm、直径1程度のもので多いようです。

琵琶湖周辺では、約6,300年前頃から使われていたようです。

0 5cm

図6 入江内湖遺跡出土の漁撈具

【釣針】

シカの中手骨、中足骨、角、イノシシの牙等で製作しています。

全国最古級の事例としては、神奈川県横須賀市夏島貝塚等で出土した約9,000年前のものがあります。関西地方や東海・北陸地方において釣針が普及し始めるのは、これまで約3,500年前頃だと考えられてきました。

ところが、今回の入江内湖遺跡の調査では、地溝の年代や釣針の形態から見て、約4,000年前頃と考えられるものが3本（うち1点は破損品）出土し、これまでの考え方を見直す資料となりました。

いずれも内側にアグ（カエシ）を作り出すように成形しています。長さは3cm前後、幅は1cm程度のもので、現在の釣り人にお聞きしますとコイやフナを釣ることが出来る大きさだそうです。

5. 暮らしを支えた漁撈具

入江内湖遺跡からは、漁撈に使われたと考えられる図5のような道具も出土しました。

これらの道具が琵琶湖周辺の暮らしを支えたと考えられます。

6. おわりに

発掘調査を実施した結果、縄文時代の石錘や土器片錘・ヤス・釣針を用いた漁撈や、丸木舟の利用の痕跡など、湖辺の暮らし振りを示す良好な資料が得られました。

ほかにも、縄文時代前期の漆塗り木製容器や古墳時

代の湖辺の暮らし振りを示す資料も多数確認したところです。

これらの詳細については、下記図書として編集し、滋賀県内の図書館等に納めていますので、御活用いただければ幸いです。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 瀬口眞司)

参考図書

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編 『一般国道8号米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書1 入江内湖遺跡I』2007年

写真提供：滋賀県教育委員会